

地元愛が地元の環境保全活動に与える影響

<要約>

近年、地球規模の環境問題に対する意識が高まり、地域に根差した環境保全活動も頻繁に行われるようになった。そこで本研究では「地元愛が強い人ほど地元の環境保全活動への参加意欲が高い」という研究仮説を立て、地元愛と地元の環境保全活動の関係を明らかにすることを試みた。特に今回の調査では、日頃から環境保全活動に参加している人とそうでない人との結果を比較するため、Webによるアンケート調査の他に、green bird というゴミ拾い活動を行う NPO 団体の活動に参加し、活動参加者へ直接調査を行った。調査で得られた回答を数値化し単回帰分析をした結果、地元愛と環境保全活動への意欲には正の相関関係があることが確かめられた。加えて、NPO 団体への調査結果では Web による調査結果より有意水準の高いデータが得られた。以上のことから、人々の地元愛を高めることは地元への環境意識を高めることにつながり、環境保全活動への参加を促すことが出来ると考えられる。

1. はじめに（問題意識）

近年、地球温暖化やオゾン層の破壊など環境問題に関する話題が絶えることがない。政府も積極的にエコを推進し、企業もエコを売りにした商品を多く発売するようになっていく。その成果もあってか、一人一人の個人でも自分に出来る範囲のことであれば環境保全に関する取り組みを行おうと考えるようになった。

そんな中、地域に根差した環境保全活動が頻繁に行われるようになってきたり、ゴミ拾いなどの活動を中心とした NPO 団体が数を増やしたりしている。こうした環境保全活動には地域への愛着が関係しているのではないかと考えた。「地域に対する愛着の形成過程の検討」引地・青木・大淵（2006）において「地域に対する愛着を扱った研究では、愛着を持つ住民ほど、地域活動への参加意向やコミュニティバスの利用率が高いことが報告されている。そこで「地元愛が強い人ほど地元の環境保全活動への参加意欲が高くなる」という仮説を立て、地域に対する愛着心と環境保全活動の関係を明らかにしようとするのが本研究の目的である。また本研究内で扱う環境保全活動とは、植林やナショナルトラスト運動のような大規模なものではなく、ゴミ拾いのような小さな活動を指すこととする。

2. 先行研究

先行研究として、環境保全活動における NPO 団体の重要性に関して言及しているものがあったのでそれを参考とした。

「環境社会学 生活者の立場から考える」鳥越皓之（2004）によると、近年ボランティアや NPO への注目度が高まっている。また「環境の社会学」関・中澤・丸山・田中（2009）では市民参加の重要性を説いている上、市民参加が実際に社会的に一定の役割を果たしているとの記述もある。以上より市民活動が環境問題の解決にもたらす影響は大きいと考えられ、とりわけ NPO 団体という固有の目的を持った団体の活動の影響は大きいと考えられる。よって本研究中では NPO 団体への個別の調査も行うこととする。

さらに「環境に配慮したい気持ちと行動 エゴから本当のエコへ」和田・三浦（2007）には「市民のごみ・環境問題についての認知は、自治体からのゴミの減量化等に関する情報により進むと考えられる。」とあるように、日本における環境問題意識の向上には自治体の影響力が大きいと考えられる。地元愛が高まり、自治体への関心・参加が高まれば自然と環境意識も高まるのではないかとということが推測できる。よって本研究では地元愛を世界観として設定し、調査を行った。

3. 調査方法

調査では Twitter と Facebook, 紙媒体を利用した。また、日頃から環境保全活動に参加

している人とそうでない人の結果の違いを比較するため、地域のゴミ拾いボランティアを行う NPO 団体である green bird の活動参加者へもアンケート調査を行った。質問は説明変数について聞く質問と被説明変数について聞く質問の 2 種類用意し、地元愛の強さを調べる質問を説明変数とおき、それをもとに環境保全活動に関する質問を被説明変数として、質問に対する回答を 1~5 の数値に置き換えて回帰分析を行った。数値については、地元愛が強いほど、環境保全意欲が高いほど数が大きくなるようにしている。尚、「地元」は「その人が地元だと思う場所」と定義してアンケートを作成し、地元の範囲については、イメージのしやすさと実際に地域の環境保全活動が行われている範囲を考慮して、市区町村単位での回答としている。

アンケートの質問を作成するにあたって、地元愛については「地域社会への態度の類型化について—その尺度構成と背景要因—」田中・藤本・植村（1978）のコミュニティ意識に関する質問項目を、環境保全活動に対する意識については「環境および環境教育に対する意識尺度の開発」黒澤・村松・島田（2012）の環境に対する意識尺度の予備調査項目を参照した。尚、具体的なアンケートについては後述のものを参照して頂きたい。

4. 結果

今回の調査では Q4~7 が説明変数(地元愛の強さ)に関する質問, Q8~11 が被説明変数(環境保全活動への意欲の強さ)に関する質問となっている。本研究では説明変数に関する質問 4 問と被説明変数に関する質問 4 問について、16 通りの組み合わせを単回帰分析することに関連性を見出すこととする。以下に、Web による調査と green bird への調査それぞれについて特に有意性の高かった分析結果を記す。ここで言う「有意性が高い」とは片側検定を行ったときに 5% で有意と判定される場合とする。

【Web(Twitter, Facebook)による調査】

<表 1 Q7 に関する単回帰分析の結果, 有意性の高かったもの① >

	係数	標準誤差	t	P-値
切片	1.938358	0.344517	5.626299	1.06E-07
X 値 1	0.29368	0.092101	3.188683	0.001785

Q7 と Q8 で単回帰分析。

係数は正となり、P 値は 0.001785 と有意性の高い結果が得られた。

<表2 Q7に関する単回帰分析の結果，有意性の高かったもの②>

	係数	標準誤差	t	P-値
切片	2.011363	0.332318	6.05252	1.38E-08
X 値 1	0.252552	0.088839	2.842787	0.005184

Q7 と Q10 で単回帰分析。

係数は正となり、P 値は 0.005184 と有意性の高い結果が得られた。

【green bird への調査】

<表3 Q4に関する単回帰分析の結果，有意性の高かったもの>

	係数	標準誤差	t	P-値
切片	3.156415	0.198316	15.9161	2.97E-14
X 値 1	0.486819	0.104858	4.642639	0.000103

Q4 と Q8 で単回帰分析。

係数は正となり、P 値は 0.000103 と有意性の高い結果が得られた。

5. 考察

研究結果より、地元愛の強さと環境保全活動への意欲の強さには関連性が有るという研究仮説は正しいと考えられる。また、回帰式の係数が正であることから、地元愛の強い人ほど環境保全活動への意欲も強い傾向にあるということが分かった。

Web 調査と green bird への調査の分析結果を比較すると、上記の質問の組み合わせでは Web よりも green bird の方が非常に有意性の高い分析結果が得られたが、他の質問の組み合わせでも総じて有意性が高いわけではなかった。これは、green bird のアンケート対象者の環境保全活動への意欲は軒並み高かったのに対して、地元愛の強さには Web による調査結果と同じようにバラつきが生じていたためだと考えられる。

6. おわりに

今回の研究では、地元愛が強いほど地元の環境保全活動への意欲が高いという調査結果が得られた。その上、環境保全活動に関わる NPO 団体の参加者を対象とした調査と、Web による一般調査ともに、地元愛が強いほど環境保全活動への意識も高いという同様の結果を得ることができ、NPO 団体への調査のほうが、有意性が高いことが分かった。

しかし NPO 団体へは一回の調査しかできておらず、標本も 25 人程度に留まっている。

全く当てはまらない あまり当てはまらない どちらともいえない 少し当てはまる 非常に当てはまる

Q10 地元の環境保全をする活動があれば、積極的に参加したいと思う。

全く思わない あまり思わない どちらともいえない 少し思う 非常に思う

Q11 あなたは地元のゴミ拾い活動のような地元の環境保全活動に参加したことがありますか。

はい いいえ

7. 引用文献

- ・黒澤春香，村松浩幸，島田英昭，2012. 環境および環境教育に対する意識尺度の開発. 信州大学教育学部研究論集 5, 1-13.
- ・引地博之，青木俊明，大淵憲一，2006. 地域に対する愛着の形成過程の検討.
- ・田中国夫，藤本忠明，植村勝彦，1978. 地域社会への態度の類型化について—その尺度構成と背景要因—. 心理学研究 49(1), 36-43.
- ・鳥越皓之，2004. 環境社会学 生活者の立場から考える. 東京大学出版会，東京.
- ・関礼子，中澤秀雄，丸山康司，田中求，2009. 環境の社会学. 有斐閣，東京.
- ・和田安彦，三浦浩之，2007. 環境に配慮したい気持ちと行動 エゴから本当のエコへ. 技報堂出版，東京.